

# 新世紀ミュージアム

香川県直島は芸術の島として注目されている。この島はそれ自体が作品を展示する場のなかに織り込まれているという。二〇〇四年に開館した地中美術館を訪れ、直島の歴史を振り返りながら芸術と文化活動、そしてミュージアムという場について考えてみた。



瀬戸内海に浮かぶ直島諸島(2011年)

際芸術祭の舞台となる島のひとつとして知られる。ここでは二〇年以上にわたって島全体を文化活動の場とする意欲的な試みがおこなわれてきた。その中核を担ったのは「ベネッセアートサイト直島」というアート活動であり、地中美術館はその象徴的な施設として出発した。

もともと島の経済の中心は大正時代に始まった銅製錬産業であった。足尾銅山や別子銅山などですでに公害が問題となり、離島が銅製錬所の候補地になった情勢のなかでその誘致に名乗りを上げた。直島もまた煙害でほとんどの木が枯れるという公害を経験しながらも、経済発展をもたらした産業を維持してきた。その後、銅の国際価格が下がり、銅製錬産業そのものが低迷する時代を迎え、新しい事業開拓を迫られるにいたった。

一九九〇年に隣の豊島で産業廃棄物の不法投棄問題が発覚した。いわゆる豊島事件である。この問題の調停の結果、一九九八年から直島に総合的な産業廃棄物処

理施設が整備され、重金属を抽出して資源として再生するようになった。豊島の産業廃棄物を受け入れることで、直島も汚染されるという風評が立つなか、島の観光や産業への対策は重要課題であった。

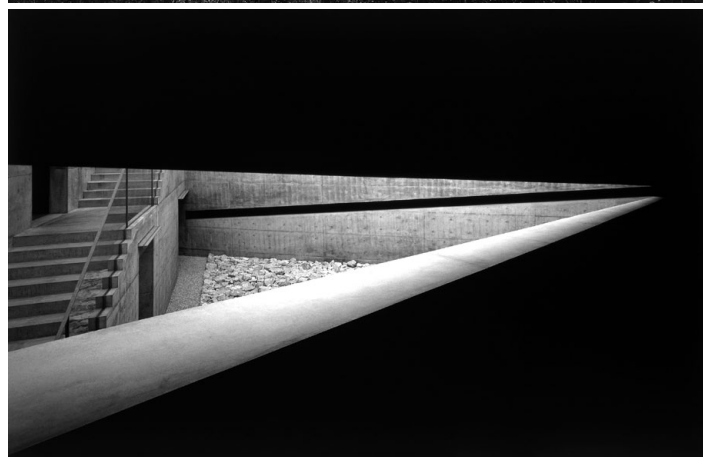
## 島を「美術館」へ

日本では美術館と博物館を区別しているが、欧米の言語ではどちらも同じことばで示される。あえて言い換えれば、美術館は美術品の博物館である。どちらにしても、モノや作品が、作った人や使われていた社会や文化などの脈絡から切り離された異空間に展示される点が共通しているが、その傾向はいわゆる博物館においてより顕著に問題となる。直島を中心とする文化活動は、作品を展示する環境そのもの（建物や島）も芸術的アプローチの対象としている。展示空間を拡大することは革新的であり、それによって文化活動が活性化されたことは間違いない。また、芸術作品の展示にとどまらず、島の住人が歴史や文化、社会に関心を深めてゆく過程を重視する活動を組み込んでいる点は、今日の博物館が目指そうとしている地域や当事者に密着する展示、そして脈絡を伝える展示に通じるものがある。

さて、船を降りると、浜辺に無造作に置かれた作品が目につく。空や海の色彩たしは自分までもが展示の一部になったかのような感覚にとらわれた。

話題の場所であることを告げずに外国のお客さんを案内したことがある。芸術的な鑑賞を終えたのち、彼らは遠慮がちにこんな疑問をわたしに投げかけた。ここに来るのは特殊な人びとなのだろうか。ここにわたしはそんなことはまったくないし、多分、画一的な特徴などないだろうと答えた。ただ、この質問によって、自分たちが特殊な空間にいるという感覚が顕在化した。

じつところ、人為的に整えられた自然環境とそれに融合するように作られた展示空間からは、芸術に潜んでいるはずの既存の美を破壊するエネルギーを感じなかった。これは、島の産業構造の転換というきわめて泥臭い現実をそれを覆い隠すような芸術というオーラがまとわりついているせいなのか、特殊な展示空間のせいなのか、われわれの消費者としてのふるまいのせいなのか、ざらつとした後味が残った。直島の人びとはどんな思いで「芸術の島」に住んでいるのか、近年の「芸術巡礼者」たちによる盛り上がりやどう見ているのか、なまの声を聞いてみたい。



地中美術館  
撮影：藤塚光政(上)、松岡満男(下) 提供：公益財団法人 福武財団

とも島の風景とも交じり合わないものいわぬ人工色の造形物は、「芸術」という絶対的な存在感を主張している。

一方、地中美術館は自然景観や人びとの生活環境を侵害しないような配慮から、建物の大半が地下に埋設されている。内部は自然光を採り入れる構造で、建物そのものが芸術作品であるようなたまたまとなつている。島それ自体を改造するような建築が、いかに大掛かりな工事であったかは想像を超える。ここに展示される三

人の芸術家のうち二人は当時は活躍中で展示スペースの設計にも参加したという。作品を展示する空間を作るといふ行為は、芸術家にとってどのような意味をもつのか興味深い。

「特殊」が生み出すもの

美術館の観覧は、日時指定の予約制でおこなわれる。そのせいか、館内にはあまり人氣がない。静かにゆったりと作品を鑑賞してもらおうという配慮なのだろう。わ